

アリス・M・コーツ著 遠山茂樹訳

『プラントハンター東洋を駆ける―日本と中国に植物を求めて―』

八坂書房 二〇〇七年九月二〇日刊

四六版 上製 三一二頁 二、六〇〇円＋税

遠山 茂樹

## 一、はじめに

本書は Alice M.Coats, *The Quest for Plants: a History of the Horticultural Explorers*, Studio Vista Limited, London, 1969 の抄訳である。今回は日本と中国の章に限って訳出したが、原著はこれに加えて、地中海諸国及び近東、スカンジナビア及びロシア、インド、オーストラリア及びニュージーランド、アフリカ、北アメリカ、メキシコ及びカリブ海諸国、南アメリカといった計十の地域から構成されており、とりあげられているプラントハンターの数は百七十余名で、巻末の索引に列記されている植物名は一千をゆうに超えている。文字とおり世界各地を駆けめぐったプラントハンターたちの百科全書的な大著である。

著者のアリス・マーガレット・コーツ（一九〇五～七八）はバーミンガムで生まれ、美術学校を卒業したのち、ロン

ドンやパリでグラフィック・アートを学んだ。第二次世界大戦中は農家でボランティア労働をする女性団体「ランド・アーミー」にみずから志願し、いわゆる「ランド・ガールズ」のひとりとして、おもに果物や野菜の栽培をしながら銃後の守りについていた。このときの体験が、のちの人生に大きな影響を及ぼしたといわれる。戦後は挿絵を描くかわら園芸植物史の研究にも傾注し、みずからもガーデニングにいそしんだ。彼女の著作の一部は『花の西洋史―草花篇』(原題 *Flowers and their Histories*)、『花の西洋史―花木篇』(原題 *Garden Shrubs and their Histories*)として邦訳されているとともに白幡洋三郎・白幡節子訳、八坂書房)。このたび抄訳した *The Quest for Plants* は名著の誉れ高く、プラントハンターに関心をもつものにとつては必携の書となっている。欧米の研究者のあいだでは、本書はコーツの著作のなかでは最も重要なものとされおり、プラントハンターを扱った書物で本書を参照していないものはないといつても過言ではない。わが国では白幡洋三郎氏(国際日本文化研究センター教授)が、プラントハンターの活動をたんねんに調べあげたものとして本書を紹介し、イギリス在野の研究者の質の高さを示すものとして高く評価しておられる(前掲書―花木篇)。

## 一、本書の構成

本書の構成は次のとおりである。

はじめに

第一章 日本を訪れたプラントハンター

鎖国日本と先駆者クライアー

日本の植物をアメリカへ

ケンペルとツンベリー

シーボルト

ジョン・グールド・ヴィーチ

ロバート・フォーチュン

カール・マキシモヴィッチ

リチャード・オールダム

## 第二章 中国を訪れたプラントハンター

極東の地、中国

ジェイムズ・カニンガム

ピエール・ダンカルヴィル

第一次使節団

第二次使節団―クラーク・エイブル

中国趣味の流行と植物への希求

―ベンジャミン・トリー

ジェイムズ・メイ

ウィリアム・カー

ジョン・ポッツとジョン・パークス

ロバート・フォーチュン

アルマン・ダヴィッド

チャールズ・マリーズ

ジェイムズ・ハーバート・ヴィーチ

チャールズ・サージャント

アーネスト・ウィルソン

コリングウッド・イングラム

ジャン・ドゥラヴェー

ポール・ギヨム・ファルジュ

グレゴリー・ポターニン

オーガステイン・ヘンリー

アーネスト・ウィルソン

ジョージ・フォレスト

フランク・キングドン＝ウオード

ウィリアム・パードム

レジナルド・ファラー

フランク・マイヤー

ヨーゼフ・ロツク

訳者あとがき

訳者参考文献

年表

植物名索引

人名索引

コーツは原著の副題のなかで *horticultural explorers* (園芸植物探検家) なる表現を用いているが、〈はじめに〉の箇所では純然たる学者である *botanist* (植物学者) との対比において、*gardener* (庭師) なる語を用いている。ここでコーツのいう「園芸植物探検家」や「庭師」とは、別言すれば「プラントハンター」にほかならない。

### 三、本書の内容と特徴

本書は十八〜二十世紀初頭にかけて、日本と中国を訪れたプラントハンターたちの植物収集活動を描いたものである。著者はプラントハンターの活動の軌跡をたんねんにたどりながら、随所にさまざまなエピソードを織り交ぜ、彼らの貴重な体験や業績を綴っている。一般書の体裁をとってはいるものの、その内容はかなり濃密であり、研究書にまさるとも劣らない。いふなれば、一定の学問的水準を保った一般書なのであり、それだけに読み応えもある。個々のプラントハンターの生涯については収集活動に従事した時期を中心に記されているが、彼らの人柄についての描写は的確で小気味よく、それがまた本書の大きな魅力にもなっている。

コーツは筆が立った。あくまでも事実在即した叙述に徹しながら、そこかしこに興味深いエピソードを巧みに配している。巷間、概説を書くのはむづかしい、とはしばしば耳にするところである。専門分野に関する該博な知識と「全体をみる眼」、加えて全体をフランスよく簡潔にまとめあげてゆく卓抜な構成力と表現力がなければ、すぐれた概説をものすることなどできない相談だからである。研究者や専門家はあまたいても、概説を書けるものがさほど多くはないゆえんである。コーツは、言葉の本来の意味で、概説を書くことのできる数少ない植物史家であつたように思われる。とはいえ、本書は一般的な通史あるいは概説書にありがちな平板で無味乾燥な叙述とは無縁である。目次をふりかえつてみれば一目瞭然であるが、なによりも人物を中心に据え、「時代」をつかがわせる当該時期の国情も踏まえながら、じつに手ぎわよく筆をすすめている。一例をあげよう。

「ウイルソンは海豊(ハイフォウ)から船で上海(シャンハイ)に向つた。最初のシーズン中は宜昌(イーチヤウ)に逗留し、あてがわれた屋形船で暮らしていた。船上生活はまことに理になつたものだった。国情が不安定だったので、あちこち移動しながら生活できる船のほつが、陸上の宿泊施設に比べればより安全だったのである。中国のどの省も義和団を支持していたわけではなかつた。この反乱は一九〇〇年夏にクライマックスを迎え、八月十三日から翌十四日にかけて、北京(ペキン)の外国公使館が襲撃された。宜昌は、それほど影響をうけなかつた。ヘンリーはウイルソンに、十二年前に自分が目にした一本のダヴィディアの在処をしめす大雑把な略図を手渡していた。ウイルソンの最初の仕事はこのたつた一本の木を、広さがニューヨーク州ほどもある山岳地帯で探し出すことであつた。二月に現地に入り、木が花をつける四月まで待つた。そして、ヘンリーみずからが訓練した採集人たちの協力を得て、ついに最近までその木があつた場所を突きとめることができたのである。だが、問題の木はすでに切り倒されていて、家に生まれ変わつていた。ほかには、千六百キロも西方の穆坪(ムオピン)「現宝興」(パオシン)にしかダヴィディアの木はないとされていた。そこはもともと、ダヴィッドがその原木を発見

した場所だった。ところが、およそ二週間後、偶然にもウィルソンは拠点にしていた宜昌のずっと近くで、もう一本のダヴィディアを見つけたのである。あたりを探してみたところ、約二十本のダヴィディアが見つかった。注意深く種子が熟するのを待ち、大量に種子を集めた。その後、旅の途次、多くのダヴィディアを見つけたが、種子をつけているのを見たのはそれが最初で最後だった。」(拙訳、一九八―一九九頁)

右の文章に登場するウィルソン(アーネスト・ヘンリー・ウィルソン(一八七六―一九三〇))は、当時世界的に有名だった英国の種苗商ウィーチ商会から中国に派遣されたプラントハンターである。またヘンリー(オーガスティン・ヘンリー(一八五七―一九三〇))はアイルランド人の医師で、当時、中国の海関に勤務し、多くの植物標本をキュー植物園に送り届けていた。そのなかのひとつにダヴィディア(ハンカチノキ)があった。それはヘンリーが絶賛してやまない植物だった。チエルシーのウィーチ商会会長ハリー・ジェイムズ・ウィーチはこのダヴィディアの植物標本を目にしていた。ウィーチ商会がキュー植物園にプラントハンターの派遣を要請したとき、当時の園長システルトン(ダイヤー)はウィルソンに白羽の矢をたてたのである。

右に引用した訳文にみられるように、ウィルソンの当初の仕事はたった一本のダヴィディアの木を、「広さがニューヨーク州ほどもある山岳地帯で探し出すこと」であった。想像するだけでも、気が遠くなりそうな話である。しかも、ときあたかも義和団事件の勃発で中国国内が激しく揺れていた時期でもある。実際、ウィルソンも動乱に巻き込まれた凡人であれば、ここで尻込みしてしまうところだが、ウィルソンはちがった。植物採集の旅を続行し、「ついに最近までその木があった場所を突きとめることができた」のである。ところが、現場に足を運んでみたら、「問題の木はずでに切り倒されていて、家に生まれ変わっていた」。なんとということだろう!しかしながら、神はウィルソンを見捨てなかった。「およそ二週間後、偶然にもウィルソンは拠点にしていた宜昌のずっと近くで、もう一本のダヴィディアを見

つけたのである」。もともとこの木はフランス人宣教師アルマン・ダヴィッド（一八二六～一九〇〇）が発見していたものであるが、ダヴィッドはこの木以外にも、ヨーロッパ人としてはじめてジャイアント・パンダやジャコウジカ（四不像）を「発見」した人物でもある。こうした珍獣の発見にまつわる逸話も紹介されている。

ところで、ウィルソンは中国に渡る前にアメリカのハーバード大学附属樹木園（アーノルド樹木園）を訪れ、そこで園長のサージャント教授と運命的な出会いをする。のちにはウィルソン自身がアーノルド樹木園の園長に就任しているのである。また、アーノルド樹木園の初代園長チャールズ・サージャントとヴィーチ商会のジェイムズ・ヴィーチは、一八九二年、すなわち日清戦争勃発の二年前に日本を訪れていた。しかも山形県は庄内地方にもやってきたのである。その箇所を、以下に引いておこう。

「ヴィーチは、当時日本を旅行中のアーノルド樹木園のチャールズ・スプレイグ・サージャント教授（一八四一～一九二一）と出会ったが、その経緯については何も触れていない。九月に鳥海山に出かけたのはサージャントの助言によるものだとしたこと、その少しあとでサージャントが旅の同行者だったと述べているにすぎない。ふたりはまず、汽車で仙台まで行った。そこから「人力車」で中央の山塊（奥羽山脈）を越え、最上川に沿って進み、河口の酒田港まで行った。近郊の寒村、吹浦から鳥海山を探訪し、多数の種子を採取したが、これといって目あたらしいものはなかった。」（拙訳、八五～八六頁）

このあとふたりはアビエス・マリージー（*Abies mariesii*）すなわちオオシラビソ（アオモリトドマツ）をひと目みようと、八甲田山に向かうのである。あの樹水でおなじみの樹木である。

このように、個々のプラントハンターの軌跡を淡々とした筆致で跡づけながら、そこかしこに興味深いエピソードを

織り交ぜ、読む者をあきさせない。通常、研究者がこの手の本を書くとなれば、多くの場合、凡庸な事実の羅列に終始するか、あるいは重箱の隅をつつき、末梢的な知識を必要以上に盛り込んで収拾がつかなくなってしまうのがおちである。ところがコーツは膨大な史／資料を読み込み、それらをつまぐ料理し、素材の持ち味をいかしながら読者が待ち受ける食卓にさりげなく出してくるのである。しかも、ほどほどにスパイスをきかせて、コーツ自身の味蓄の敏感さがなせる技とでもいえようか。ここに本書が公刊以来、研究者のみならず一般読者にもひろくうけいれられてきた最大の理由があるように思われる。要するに、本書は「読ませる」のだ。

人物描写もしかりである。たとえばレジナルド・ファラー（一八八〇～一九二〇）とウィリアム・パードム（一八八〇～一九二二）というふたりのプラントハンターについてふれていいる箇所に、次のようなくだりがある。

「ファラーはがらがら声で、興奮しやすいタイプ。かなりの口髭をたくわえており、肥満ぎみ。一方のパードムは、細身で背が高く、北欧系の大男。気質はおだやかで、口数も少なかった。ファラーにしてみればパードムは、まったく非の打ち所のない友人であり、助っ人であった。ちなみに、ファラーはパードムよりも二ヶ月ほど年長だった。ふたりは開通まもないシベリア横断鉄道（一九〇四年完成）で北京入りした。」（拙訳、二五一頁）

対照の妙がひかる。しかも、このふたりの生没年をみると同じ年（一八八〇年）に生まれていることがわかるが、「ファラーはパードムよりも二ヶ月ほど年長だった。」とコーツの叙述はこまかい。そして「ふたりは開通まもないシベリア横断鉄道（一九〇四年完成）で北京入りした。」と続くのであるから、ファラーもパードムも日露戦争のさなか突貫工事で開通したての周バイカル鉄道を利用し、東清鉄道に乗り継いで北京にやってきたのであろう、と想像の羽もシベリア鉄道よろしく延びるといふものだ。

ところで、容易に推測されることであるが、プラントハンターの旅はつねに危険をともなつた。十九世紀半ばに門戸を開放した中国に先陣を切つてやってきたのはフランス人宣教師であつた。そのうちのひとりスーリエはチベットのラマ僧に捕まり、拷問を受け、銃殺されている。折しも、中国・チベット間の關係が悪化していたときであつた。また、幕末の日本を訪れたことでも知られる英国のプラントハンター、ロバート・フォーチュンは、中国では海賊と銃撃戦までくりひろげている。当初、フォーチュンを派遣した園芸協会は銃の支給をしづつていた。護身用にはステッキ一本あれば十分というのである。だが、中国の国情についてはフォーチュンの方が一枚上手であつた。最終的には協会もフォーチュンの意向をくんで銃を持たせることになるが、そのおかげで彼は命拾ひする。まことに Fortune は fortunate であつたといふべきか。

また、数多くのサクラソウやシャクナゲをイギリスに持ち込んだことで知られるジョージ・フォレスト（一八七三—一九三三）は、非業の死を遂げた。彼は一九三〇年、最後の探検に旅立つた。引退前にみずからの主要な活動舞台であつた雲南の地をもう一度訪れ、有終の美を飾るつもりだつた。事実、最後の手紙にはそう書いていた。

「万事もまくいけば、辛かつたこれまでの苦勞もむくわれ、有終の美を飾ることができようである。」運命は、この言葉を真に受けてしまつた。一九三三年一月五日、梱包を済ませると、フォレストは獵銃片手に外出した。その時である。彼は突然悲鳴をあげ、その場で倒れた。そして、誰にも見とられることなく、息をひきとつたのである。遺体は騰越に運ばれ、友人リットンのそばに埋葬された。（拙訳、二二二—二二三頁）

右に引用した手紙の文面は、なんと予言に満ちていることが、フォレストは狩りに出かけ、騰越から数マイルのところまで亡くなつたのである。ちょうど第二次世界大戦の最中、日本軍と中国国民党軍が滇緬公路（旧・援蒋ルート）の攻

防をめぐって死闘をくりひろげたあたりである。フォレストは種々の記事や手紙は残しているものの、まとまった体験記を上梓する時間はいそ見つけたことができなかった。ケン・ビーケンが述べているように、彼はおそらくその仕事を引退後の愉しみとしてとっておいたにちがいない (Ken Beeken, "Primulas and the Pnathunters" Web site) しかし、不慮の事故が永久にそれを奪い去ってしまったのである。なんとも惜しまれる。

## 四、プラントハンターとその時代

プラントハンターが日本にやってきたのは幕末から明治にかけて、また中国の場合はアヘン戦争以後、すなわち近代になってからのことであった。もっともアヘン戦争をもって中国近代の幕開けとする見方には問題がないわけではない (ポール・A・コーエン『知の帝国主義』)、それはしばらく措くとして、アヘン戦争以前にも中国においてプラントハンティングがおこなわれていたことは、本書に述べられているとおりである。しかしながら、欧米のプラントハンターが「本格的」に中国の地で植物採集活動にのりだすのは、やはりアヘン戦争以後のことなのである。日本についていえば、既述のフォーチュンは日本人の花を愛でる国民性を英国人に勝るとも劣らぬものとして高く評価している (Xロバート・フォーチュン『幕末日本探訪記』)、江戸時代に独自の園芸文化が開花していたことは周知の事実に属するであろう。受皿は、御一新を待たずして、すでに準備されていたのである。

プラントハンターが活躍した十九世紀半ばから二十世紀前半といえば、歴史上「帝国主義の時代」として知られている時代である。ジェフリー・パラグラフは『現代史序説』のなかで、かのバーナード・ショー (一八五六～一九五〇) でさえ、中国人がみずから文明生活を促進できなければ、中国人に代わってそれをつくりだしてやるのはヨーロッパ列

強の義務だと語っていた（「文明化の使命」観）というエピソードを紹介しているが、その根底にはヨーロッパ世界は文明社会であり、非ヨーロッパ世界は野蛮な非文明社会であるという二項対立的な見方がある。これは当時の知識人に共通する考え方もあった。アンドリユー・ポーターのひそみに倣えば、博愛的帝国主義とでもいうべきものである（アンドリユー・ポーター『帝国主義』）。さらに遡れば、ヨーロッパ人が「文明の進歩」なるものさしをふりかざして、アジア諸国に「停滞する非文明国」というレッテルをはりつけたのは、〈帝国の世紀〉の前夜、すなわち十八世紀末のことであった（P・J・マーシャル／G・ウィリアムズ『野蛮の博物誌』）。

いずれにせよ、プラントハンターもそうした時代の申し子であった。だが、単純に「時代」のひとつことで片付けてしまつては、こぼれ落ちてしまうものがあまりに多すぎる。個人が「時代」や歴史概念、あるいは理念のなかに埋没してしまうことは、歴史の狭隘化につながるおそれがある。「文明の拡大」という時代の波にたゆたいながらも、プラントハンターたちの触覚は、畢竟、未知の植物の探究に向けられていたのであり、「文明の拡大」とはまた別の次元のものであったとみるべきであろう。彼らを見果てぬ国へと駆り立てた動機はさまざまであったが、植物に対する類まれな好奇心と行動力は共通している。

ここで卒然ながら、キース・トーマスが名著『人間と自然界』において近代イギリスにおける自然観の変遷をたどり、新しい感受性が生みだされていったことを明らかにした際に、考察の対象としたのが草花であり、樹木であり、動物であったことが思いおこされる。あの碩学の植物に対するおもいはなみなみなぬものがあり、他の歴史家の追隨を許さない。具体的な事物から歴史を物語ることには困難も伴うが、それでも歴史の面白さは具体的な細部ディテールにある。

視点をかえて、近年わが国でも関心をあつめている環境保護主義と帝国史とのむすびつきを考えてみるに、植物学が動物学、林学、地理学あるいは生態学などとならんでひとつの結節点となっていることは、まちがいのないところである。これに関連して、植物園の果たした役割は、その重要性にもかかわらず、従来それほど注目されてこなかったよう

に思われる。あらたな植民地の獲得は、他方であらたな植民地植物園の創設を意味し、国内に広範な植民地植物園のネットワークが形成されていったのである（ルシル・ブロックウェイ『グリーンウエポン』）。その中枢にあったのがキユー植物園であり、キユーはまたプラントハンターが持ち込んだ植物の一大集積地でもあった。こうした植民地植物園やプラントハンターの活躍が学問としての植物学、ひいては博物学の確立を促したことも見落としてはならない（リン・バーバー『博物学の黄金時代』）。

しかしながら、植物学ひとつをとってみても知の集積は膨大であり、まさにそえゆえに歴史学との有機的な関連をさぐる試みも、緒についたばかりという気がする。プラントハンターの歴史的な役割も、ガーデニング大国イギリスの陰の立役者というにとどまらず、感性の歴史や帝国史あるいは環境史といったさまざまな観点から見直されるときがやってくるにちがいない。

コーツ女史は四十歳頃から関節炎に悩まされていたという。だが、それにもめげず、もちまえの意志の強さと明るさで、園芸と執筆活動を続けた。植物に対する愛情と知的好奇心は人一倍であった。本書が公刊されたのは一九六九年、すなわちコーツ六四歳のときである。園芸植物史家としてヴェテランの域に達していた。他方、その頃には持病も悪化の一途をたどっていた。彼女が大英図書館に足を運ぶさいには、老いた母親が車椅子を押しながら資料収集を手伝ったという。コーツが亡くなる二年ほど前に、王立園芸協会とバーミンガム大学はそれぞれヴィーチ記念メダルと名誉学位を授与し、その功績をたたえた。在野の研究者であったアリス・マーガレット・コーツは、そのすぐれた業績ゆえに、いまなお生き続けている。

## 五、おわりに

八坂書房編集部の三宅郁子さんからこの仕事の依頼を受けたのは、二〇〇三年一月下旬のことであった。八坂書房といえば植物関係のすぐれた書物を出版していることで知られているが、個人的には、なによりも白幡洋三郎氏のプラントハンター物語や植物にまつわる伝承・歴史に関する書籍を世に送り出している出版社という印象が強かった。浅学菲才を顧みず、翻訳をお引き受けしたのは、つまるところ私自身がプラントハンターと植物にまつわる歴史に少なからず関心を抱いていたからにほかならない。

アーノルド樹木園関係の資料の収集に際しては、東洋英和女学院中等部時代の教え子である三須弥生さんの手を煩わした。諸般の事情により海外渡航もかなわぬ身となってしまう訳者に代わり、彼女は留学先のマサチューセッツ工科大学からアーノルド樹木園にまで足をほこび、同樹木園の附属図書館で資料収集に従事してくれたのである。記して感謝の意を表したい。

それにしても、文字通りの拙訳が成るまでに、なんと多くの歳月をついやしたことであろうか。あらためて、みずからの非力を痛感する次第である。それでも、こうして小書を世におくり出すことができたのも、ひとえに担当編集者・三宅郁子さんのおかげである。そのお人柄ゆえに、終始、慎み深い態度で「黒衣」に徹してくださったが、三宅さんのこまやかな気配りと植物に対する造詣の深さ、そして的確な助言がなければ本訳書はありえなかった。駄馬は最良の御者を得て、今ようやくひとつの大きな峠を越えた。そして地平線のはるかかなたに、輻輳する未踏の山脈がみえかくれしている。

〔追記〕本書『プラントハンター東洋を駆ける』は、「日本農業新聞」(二〇〇七年十月二十二日付)、「東京新聞」(二〇〇七年十一月十八日付朝刊)、「中日新聞」(二〇〇七年十一月十八日付朝刊)の各紙〈新刊〉コーナーでご紹介いただいたほか、「信濃毎日新聞」(二〇〇七年十一月二十五日付朝刊)では過分な〈書評〉を頂戴した(評者は植物生態学者・京都大学准教授、酒井章子氏)。また雑誌『サライ』(小学館、二〇〇七年十二月六日号)「サライブックレビューや『學燈』(丸善広報誌、二〇〇七年冬号)和書新刊紹介でも、とりあげていただいた。さらに初稿校正脱稿後、「読売新聞」(二〇〇八年一月九日付夕刊)〈本よみうり堂〉において、紹介記事を得た。この場をおかりして、関係各位に心よりお礼申し上げます。